

考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（18）

－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－

古墳時代研究プロジェクトチーム

例　　言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第25号には横浜市域の1268-1（継続掲載）を掲載した。本資料は横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷古墳の調査時のノートで数年に渡って掲載し、前回までに概ね紹介を終えた。本編では1268-2、1268-3の内容の紹介と、主に1268-1の資料内容との照合、検討を行う。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～19に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は植山英史が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は【調査（踏査）年月】【資料保管場所】【記載内容概略】とし、2. は【（遺跡及び）遺物（遺構）概要】【掲載図書】【掲載図書概略】【小結】などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡位置図

年報番号横浜市 01268-1、-2、-3 濑戸ヶ谷古墳 (11) 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月] 1943・1950年

[資料保管場所] 東京国立博物館

[瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート11]

1. 赤星ノートの内容

01268-2、3はスケッチブックで、主に埴輪の写真や埴輪の解説などが書かれている。埴輪の写真は瀬戸ヶ谷古墳以外の古墳から出土した鞍形埴輪などの完形品の写真である。埴輪の特徴のメモとスケッチなどもある。メモには「日本の美術 第19号」「神奈川県建築史図説」などの記載もあり、これらの図書を参考に赤星氏が神奈川県史刊行の際にまとめた資料と推定される。また写真には瀬戸ヶ谷古墳の発掘調査時に撮影した遺物出土状況写真が含まれている。調査時の写真は計6枚で、以下、この写真について紹介する。

写真1・2は盾形埴輪の写真である。それぞれ大形の2片が異なるカット割りで撮影されている。埴輪は草の上に置かれて撮影されており、取り上げられたものを撮影したと推定される。写真3は埴輪列の状況写真で、「前方部東側面の円筒列（横須賀考古学会発掘）」と記載されている。『紀要25』で瀬戸ヶ谷古墳全体の埴輪出土位置図（第2図・再掲）を紹介したが、前方部東側に「昭和25.1.22 横須賀考古学会○発掘16個（？）円筒列」の記載があり、同地点を撮影したもの可能性がある。写真4・5は盾形埴輪の出土状況写真で「楯下半部出土」と記載されている。写真1・2は盾形埴輪の楯部分の上半部で、写真4・5は盾形埴輪の下部の円筒部分の写真であることから、同一個体の可能性も考えられるが、写真からは判断出来ない。写真6は「瀬戸ヶ谷古墳（1）」「紀要12」の写真6で紹介した円筒埴輪・朝顔形埴輪の出土状況写真と同じ個所を撮影したと考えられる。『紀要12』の写真は『神奈川県史資料編20』に掲載されているもので「（昭和18年撮影）」と記載されている。この写真は斜めから撮影しているのに対して、本写真はほぼ真上から撮影されている。同資料は台紙に貼られた写真で「横浜瀬戸ヶ谷古墳（戦前）」の記載がある。また、写真のカットは『紀要23』第2・3図の埴輪出土状況図と類似することを同稿で指摘した。

盾形埴輪について他に記載がある赤星ノートの資料は『紀要25』で紹介した埴輪出土位置図がある（第2図）。同図には、後円頂部の西側の埴輪列の中に「楯」の記載がある。また、後円部からくびれ部にかけて下段と2段目の埴輪列の間に「形象列」があり、この中にも「楯」の記載が見られる。この埴輪出土位置図に書かれた「楯」と写真との関係だが、写真1・2については一旦取上げたと推定されるもので、出土位置は不明である。また写真4・5についても拡大写真であり、後円部頂部のものか、墳丘の形象埴輪列のものか判別するのは困難である。瀬戸ヶ谷古墳出土の盾形埴輪は、東京国立博物館が所蔵しているものが知られている。展示されていた同博物館所蔵の盾形埴輪は、楯部の下半から円筒部の上端にかけて残存しており、楯部の上部及び円筒部の下部は復元されている。一方、写真1・2の盾形埴輪の楯部は上部が残存しているもので、残存部は東京国立博物館所蔵の復元部分と類似する。このため、写真1・2の個体は同博物館所蔵の盾形埴輪の楯部上部の可能性がある。写真4・5との比較では、写真の円筒部は下部まで残存しているが、東京国立博物館所蔵のものは円筒部の下部が復元されており、やや様相が異なる。写真1・2との比較も同様であるが、楯部の残存度や詳細な形状など更に検討が必要と思われる。

写真撮影の年代について整理すると、写真6は『神奈川県史資料編20』の記載及び赤星ノートの出土状況図が作成されたと考えられる時期から、昭和18年の調査時に撮影されたものである。写真4については、



盾形埴輪写真

写真1(上)・写真2(下) 盾形埴輪写真



前方部東側面の円筒列（横須賀考古学会発掘）

写真3 前方部東側面の円筒埴輪列

前述したように「前方部東側面の円筒列（横須賀考古学会発掘）」の記述から、昭和25年の調査の前方部東側埴輪円筒列写真である可能性が考えられる。写真の遺物以外の特徴を見ると、写真1・2・4～6は横割りのカットで写真1・5・6の上端には、パーフォレーション状の穴の跡が見られる。写真3は縦割りのカットで穴の跡は見られない。写真1・5・6及び写真1とセットになっている写真2、写真5とセットになっている写真4も昭和18年調査時の写真で、写真3のみが昭和25年調査時の写真である可能性が考えられるが、推定の域を出ない。



橋下半部出土

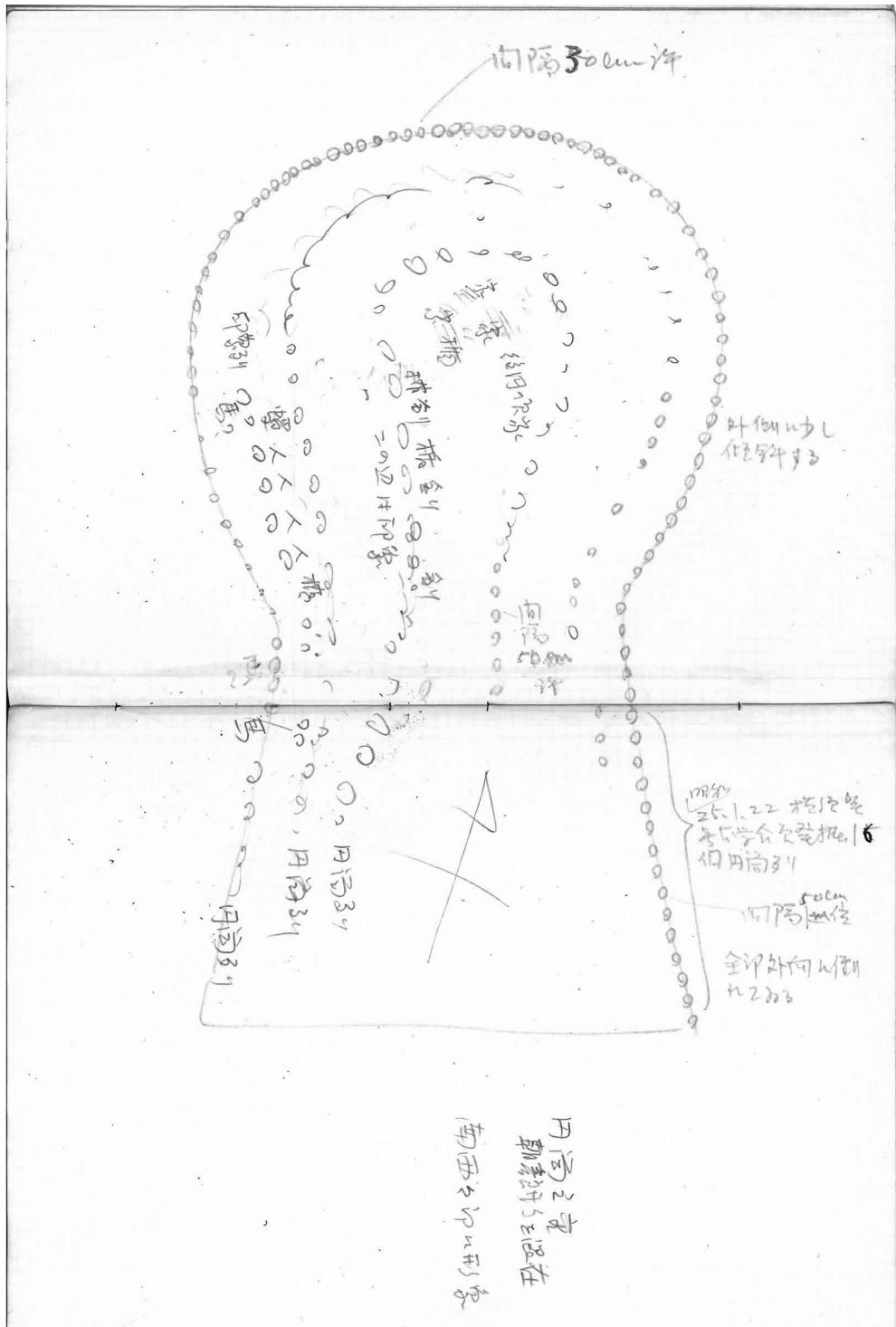
写真4(上)・写真5(下) 盾形埴輪下半部出土状況



写真6　円筒埴輪・朝顔形埴輪出土状況

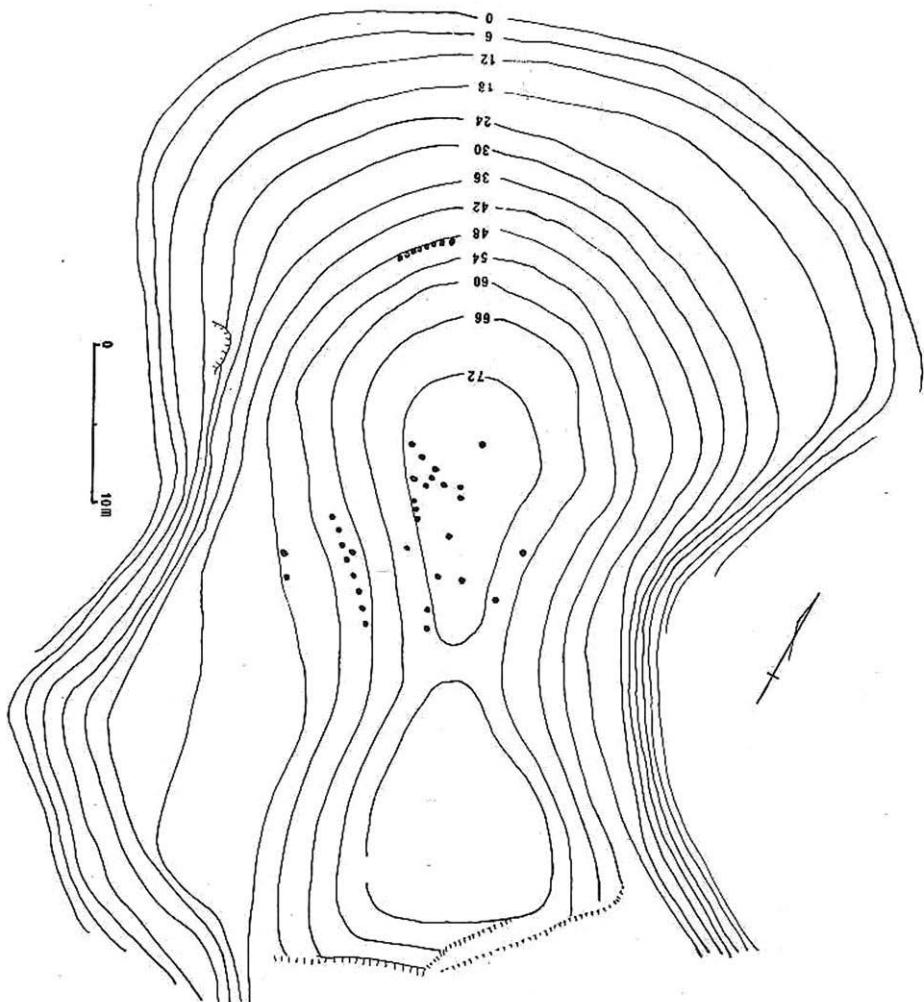
最後に赤星ノートに記載されている埴輪出土位置図（第2図）と、今まで紹介した出土状況図や写真などの関係や、前回指摘した『神奈川県史資料編20』に掲載されている古墳実測図（第3図）の埴輪位置との違いについて見ていくこととする。赤星ノートの埴輪出土位置図は、前述したように図に昭和25.1.22の記載が見られることなどから、最終的な追記を実施したのは昭和25年以降と考えられるが、記載された埴輪の位置については昭和18年の調査を含んでいると考えられる。今まで紹介した資料の中には、埴輪の出土位置が記載されているものが幾つか存在している。『紀要16』では後円部西側斜面の人物埴輪を中心とした埴輪列のスケッチ図を紹介した。第2図の後円部西側に記載された「形象列」「馬?」「人」「人」「人」「人」「楯」は、このスケッチ図の埴輪列を示していると推定される。また、『紀要18』で紹介した埴輪片の出土図は、後円部西側斜面の人物埴輪列を中心とした埴輪列の東側上方の状況を描いたものと推定される。今回紹介した写真6の円筒埴輪・朝顔形埴輪の写真は、『紀要23』で紹介した出土状況図と同一個所で、出土位置の図から後円部東側の前方部との接続部付近で、墳頂部に近い斜面のものと考えられる。『紀要23』では後円部と前方部の接続部で古墳の主軸線上に出土の×印が描かれた大刀形埴輪の図も紹介している。第2図では主軸線上に当たる個所には埴輪の記載は無いが、後円部の墳頂東側に「この辺は形象」と書かれ、最も前方部に近い個所の形象埴輪に「剣」と書かれており、これが該当する可能性がある。『紀要24・25』では、家形埴輪の出土状況図を紹介した。出土状況図には位置関係を示していると考えられる「ホ」、「ヘ」、「ト」などの記載が認められるが、基点となる位置については今まで紹介してきた資料の中からは読み取れない。第2図には後円部の中心から北寄り一帯に「後円頂家」「家」「家」「家」の記載があり、その他の位置には「家」の記載はないため、後円部墳頂の家形埴輪の出土状況図である可能性が考えられる。

次に『神奈川県史資料編20』に掲載された第3図は、一見して第2図に較べて埴輪出土位置のドットが少ないことが判る。第3図の後円部東側傾斜面の前方部寄りには、一列に並んだドットが描かれているが、こ



第2図 墓輪出土位置図

これは図の位置関係から、先に紹介した人物埴輪を中心とした埴輪列と推定される。また、後円部東側で前方部との接続部に近い個所には、埴頂付近の斜面に2点のドットがある。この2点のうちいずれかが、今回紹介した写真6及び『紀要23』の出土状況図等の円筒埴輪・朝顔形埴輪の可能性が考えられる。後円部埴頂部の西側には多数のドットがあり、第2図の「この辺に形象」と書かれた一帯の形象埴輪列に対応する可能



第3図 濑戸ヶ谷古墳実測図 (『神奈川県史資料編20』)

性がある。また、後円部中心より僅かに東側に位置するドットは第2図では「家」「家」「家」と書かれた付近に当たる。第3図のドットは1点であるが『紀要25』で紹介した図には、「箱形」の基部が出土したと推定される書き込みがある。ドットはこの「箱形」に対応する可能性も考えられるが、位置関係が確定していないためここでは推定に留める。『神奈川県史資料編20』に掲載された実測図の埴輪出土位置ドットは、今まで紹介してきた赤星ノートの資料に記載されているものが多く、特に主に昭和18年の調査を記録し、昭和25年の調査以降に追記されたと思われる方眼ノートの詳細記録と合致する点が多い。但し、同図にある後円部端の標高48mラインに並ぶ埴輪列など、今まで紹介してきた資料には詳細が書かれていないものもあり、その他の資料も使用して作成したと推定される。

(植山)

[掲載図書]

『神奈川県史』資料編20考古資料 1979

引用・参考文献

植山英史「考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡 濑戸ヶ谷古墳1～9」『研究紀要 神奈川の考古学』12～18・23～25

東京国立博物館 1986『東京国立博物館図録 考古遺物編』(関東III)

横浜市歴史博物館 2001『瀬戸ヶ谷古墳』『横浜の古墳と副葬品』